

# 特別支援教育のあゆみ

2015年12月12日～2016年3月29日 於・京都市学校歴史博物館

特別支援教育は、「特殊教育」や「障害児教育」など、時代によってその呼び方が変わってきた。さらに、制度や教育内容など、呼び方だけでなく様々なことが遷り変わる中で、発展してきた。

そして2015年12月現在、京都市では、各養護学校は障害種別を超えた総合制の「総合支援学校」へと生まれ変わり、「総合育成支援教育」という独自の取組がなされている。本図録は、企画展「京都における特別支援教育のあゆみ」の展示史料及び解説の一部を、若干加筆修正し、まとめたものである。紙面の都合上、概略的にはなるが、京都市における1900年代以降の特別支援教育のあゆみを、様々な史料を通してたどっていきたい。障害の有無にかかわらず、教育を受ける権利は子どもの権利であることを見つめ直す一助としていただければ、幸いである。

※引用文には「」をつけ、現在の観点では不適切な表現である場合も必要に応じて歴史的用語をそのまま用いた。

※所載を明記していない史料は、すべて個人または学校蔵である。

## 1. 戦前の「特殊教育」

京都における特別支援教育は、1874(明治7)年頃に京都の小学校教師・古河太四郎が聾教育を開始したのがその始まりとされ、1878(明治11)年には京都盲啞院が開設された。一方で、知的発達に遅れのある児童の教育については、1900年代初頭に淳風尋常小学校に私設された特別学級に始まり、その取組は1906(明治39)年に同校に設置された春風倶楽部へと引き継がれる。

### 脇田良吉 懸賞論文「小学校児童訓練法」(1904年11月)、白川学園蔵

京都府教育会が募集した懸賞論文。白川学園の実質的な創始者である脇田良吉の、初期の教育実践・思想がわかる重要史料。脇田は1898年から京都市下京区の淳風尋常小学校に訓導として勤務。この頃、全国的に尋常小学校児童就学率が急上昇し、「劣等児」や「成績不良児」の教育が問題となっていた。京都府教育会が「不完全なる心意を有する児童につきての調査」を実施したのは、1902年である。淳風小は校長中川至の理解のもとに特別学級を設置していたが、その担任は脇田ではなく、脇田とともに特殊教育に尽力した箕田助五郎だった。

### 春風倶楽部 趣意書及び規則(脇田良吉『白川学園』1926年より)、白川学園蔵(下写真)

1905年、脇田は京都府に公式な特別学級設立の建議をしたが、受容られなかった。そこで脇田は、1906年9月に松原通以南11校の校長及び学務委員を後援として、淳風小に私設の「特殊教育」学級である春風倶楽部を設置した。

### 脇田良吉『注意の心理と低能児教育』(矢島誠進堂、1908年)、白川学園蔵

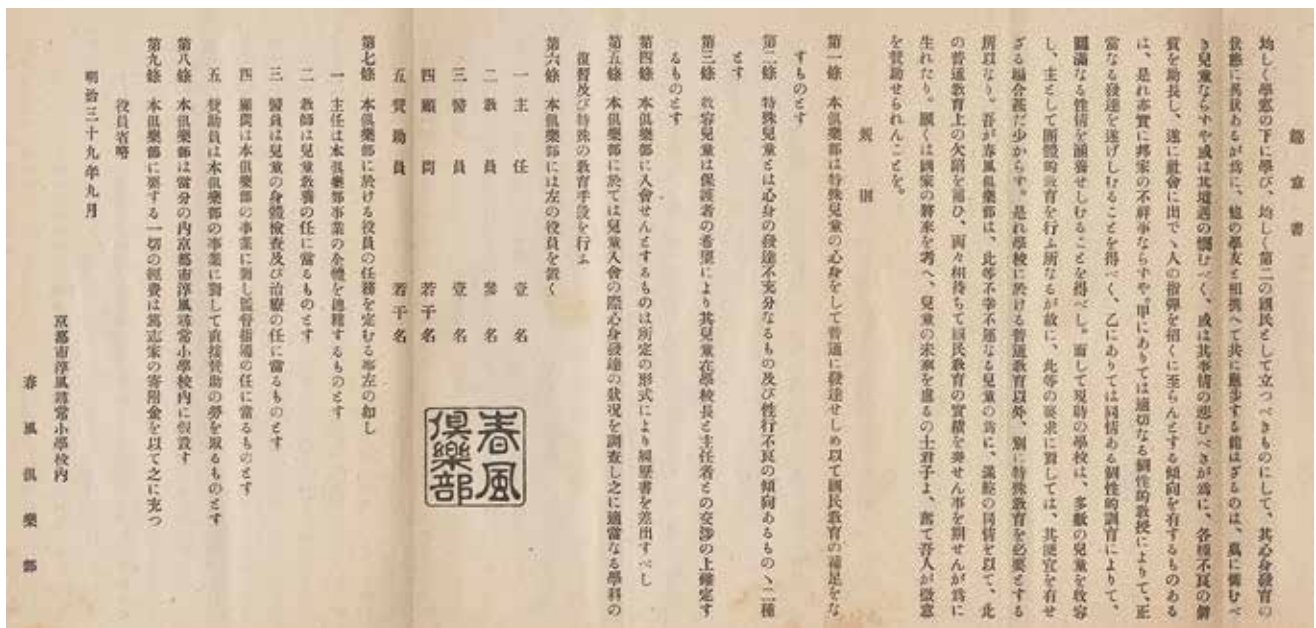
日本に音楽及び体育教育を普及させた元文部官僚伊澤修二と、日本最初の心理学者である東京帝国大学教授元良勇次郎は、「劣等児」の「精神鍛錬」研究のために吃音児矯正を主な課題としていた東京の楽石社へ、1907年4月に京都から脇田を招き、主任とした。伊澤・元良と脇田は、その前年に脇田が滝乃川学園等を視察した際に出会っていた。本書は楽石社での研究成果を世に示したものだ。1909年6月に帰京した脇田は、翌月に創設された府立白川学園の主任教員となる。脇田は1912年に同園が私設化された際に園長となり、翌年発表の論文で、日本で初めて「低能児」という用語が不適切語だと明確に批判した。

### 『昭和四年四月起 個別学級日誌 田中訓導』(1929年4月～37年4月) / 『昭和十二年四月以降 特別学級日誌 田中訓導』(1937年4月～45年4月) / 『昭和九年九月二十一日 室戸台風 特別学級避難記録 田中訓導』(1934年9月) / 田中壽賀男『養正特別学級概況』(1935年7月) / 『昭和十一年二月二十四日 座談会摘要 田中訓導』(1936年2月)、養正小学校蔵

1929年4月から1945年4月までの養正尋常高等小学校特別学級(「個別学級」)での様子が記された、貴重な史料類。1934(昭和9)年9月21日、観測史上最強といわれる室戸台風が直撃した日のことは、当日夜に別冊に記されている。養正尋常高等小学校の特別学級は1925年に設置され、田中壽賀男訓導が担任となった1929年以降、特殊教育の実践が本格化した。『概況』で田中は、「児童自身が、学校生活を楽しむ様になり、学習にも愉快を感じ、交友と遊び、其日々々を無駄に過ぎぬ様になって茲(ここ)にはじめて、この特別児童教育の使命が達せられる(15頁)」と記している。『座談会摘要』には、唱歌教育の特別学級における実践記録や、保護者会懇談のメモなど、様々な記録が綴じてある。

### 京都市特別学級附設校一覧表(昭和十四年一月現在)(京都市特別児童教育研究会『異常児教育』第4号、1939年4月より)(次頁写真)

京都市における公式な特別学級は、奈良女子高等師範学校附属小学校特別学級の初代担任であった齋藤千栄治が校長として赴任した成徳尋常小学校に、1922年に設置されたのが最初だが、齋藤が滋野尋常小学校に転出した際に閉鎖された。また、弥栄尋常小学校にも1925年に設置されたが1933年に閉鎖された。よって両校はこの図には出てこない。



**京都市特別學級附設校一覽表**  
(昭和十四年一月現在)

學校名	附設年月	一 年	二 年	三 年	四 年	高 一	高 二	計
桃 南	大正十二、四	〇	三	一	二	一		八
衆 樂	昭和二、四	二	三	〇	四	〇		九
滋 野	大正十五、四	一	二	二	一	二	五	一五
養 正	大正十四、一	〇	八	三	二	一	四	一八
出 雲	昭和五、五	〇	〇	六	一	四	〇	一一
格 致	昭和二、八	〇	〇	二	一	三	三	九
一 橋	昭和九、四	〇	〇	〇	二	三	五	一〇
七 條	大正十一、四	二	五	二	三	五	一	一八
崇 仁	大正十五、四	二	四	三	三	五	二	二〇
計		七	一九	一九	二六	一八	二〇	一三六

京都市小學校児童總數十二萬二千二人中精神薄弱児(一%)二千四百人アリ、コノ中特別ノ教育ヲウケテ居ル者一、二八名ニ過ギズ、残り二千二百餘人ハカヘリミラレナイノデアル。



**田村一二『精神薄弱児(劣等児低能児)の図画』1934年**

田村は1933年に特別学級を受け持ち、本書はその1年半後に書かれた。後に『忘れられた子等』に描かれる、特別学級を受け持った当初の苦悩と、そこからの脱却、教育実践の変遷などが、記されている。また、冒頭部分にある「何とか統計的にでも纏めた方がよかったかも知れないが一人一人の子供の持つ癖を無視して仕舞ふ事が出来なかったし又この書き方の方がこの子どもたちと云ふものがよく判るだらうとも思ったし」という記述には、田村の性格がよく表れている。

京都市滋野尋常小學校『精神薄弱児の作業を主としたる教育』1929年  
滋野小の特別学級は、1926年4月に齋藤千栄治が校長として赴任した時に設置された。本書からは、田村一二が受け持つ以前の特別学級の様子がわかる。1930年頃から、「低能児」に変わり「精神薄弱児」という用語が一般的に用いられるようになった。

**京都市滋野尋常小學校『精神薄弱児の生活指導』1936年**

1934年に京都市教育会が小學校教員研究論文を募集。田村の論文が当選し、本書はその原稿に加筆したもの。10枚の巻頭写真や郷土科についての記述は、教育史研究上の重要な史料。

**精神薄弱児教室・歯みがき体操・手工(京都市滋野尋常小學校『精神薄弱児の生活指導』1936年より)**

写真に写る教員は、「わが国の特殊教育の開拓者」(糸賀一雄)と呼ばれる田村一二訓導。田村が後に発表した自叙伝的小説『忘れられた子等』は、この「精神薄弱児」クラスを舞台にしており、円形の机や、歯磨きを通した教育実践のシーンも登場する。「手工」の説明には、「ガラガラコンコン一生懸命」とある。知育・情育・意育のうち、田村が特別学級で最も重んじたのは、情育であった。この実践は、「精神薄弱児」には健常児と同等かそれ以上の感情的豊かさがあるので、情育を通して知恵・意志を育むことが重要だとする、戦後の特殊教育実践者・森脇功の教育思想へとつながっている。

**田村一二『鉄は切れる』(京都市教育部学務課, 1941年, 初版)**

『精神薄弱児の生活指導』以降の、田村の教育実践記録。全10章からなる。『京都日出新聞』の田村の連載小説をまとめた10章『忘れられた子等』は、後に加筆され、単行本として刊行された。



**田村一二『忘れられた子等』(教育図書, 1942年, 初版)**

田村の滋野小での日々を描いた教育小説。「先生の巻」「子供の巻」からなる。田村は執筆の目的を、「彼等の持つ純真性を、無邪気な人間味を少しでも知って貰ひたい」(『鉄は切れる』)と記し、表紙絵と挿絵には特別学級児童の作品を用いている。戦後の1949年に映画化(稲垣浩脚本・監督)。本書刊行の翌月に田村は、同じ教育図書から『石に咲く花』を刊行している。



**田村一二『手をつなぐ子等』(大雅堂, 1944年, 再版, 帯付)**

『忘れられた子等』の続編。特別学級に入った一人の児童を中心に話が進められる。ただし、戦況悪化の時勢を反映して、前作ではほとんど見られなかった、特別学級の意義が国家と結び付けられて説明されるシーンが多々ある。発行直後から伊丹万作によって映画化のための脚本が書かれ、戦後、伊丹が亡くなった後の1948年に映画化(稲垣浩監督)。



**池田太郎『子供を観る』(一條書房, 1943年, 初版)**

池田太郎は、1920年代末より衣笠尋常小学校、次いで第二衣笠尋常小学校(現大將軍小学校)に訓導として赴任。本書の装丁・装画は田村による。戦争末期に教員を辞した池田と田村は滋賀県に移り、戦後、糸賀一雄とともに児童福祉施設・近江学園を創設した。

**京都市特別児童教育研究会『異常児教育』第4号, 1939年**  
**京都市特別児童教育研究会『勿忘草』第1号, 1942年**

1927年頃に創設された京都市特別児童教育研究会は、機関誌『異常児教育』を計4号、その後継誌である機関誌『勿忘草』を計2号、発行した。戦前の特殊教育を知るための重要史料。当時の著名な特殊教育実践者として、養正校の田中、滋野校の齋藤・田村、第二衣笠校の池田のほか、崇仁校の高宮文雄・南博(後の市視学)がいた。『勿忘草』第1号編集後記において田村は、機関誌改称の理由を、異常児教育だと「意味が広すぎる」からと説明しており(「異常児」には特異な成績優良児なども含まれる)、さらに、『学園の雑草』として『忘れられた子等』として、省みられていない彼等精神薄弱児の研究誌としては、蓋し好適の題名である」と記している。



**精神薄弱児童養護展覧会(大阪朝日新聞社会事業団主催)における京都市特別学級の出品の一部(京都市特別児童教育研究会『異常児教育』第4号, 1939年より)**

この展覧会は、大阪朝日会館で1939年1月24日から4日間、開催された。来会者は5070人、児童相談者は240人とされる。京都市からは、京都市特別児童教育研究会の出品を主とし、滋野校、養正校、七条尋常小学校、崇仁尋常小学校の4校からの出品もあり、これらは会場入口付近の、会場で最も広い場所で展示された。

**京都帝国大学医学部小児科学教室(指導服部教授)三谷隼雄『京都市に於ける精神薄弱児を対象とせる養護学級児童検診報告第一報』1943年**

1941年10月に滋野校、1942年10月から12月にかけて他校の「養護学級」で行われた調査の報告書。「国民の質と量との向上を企図することこそ最大の重要事である」という問題意識が記されており、調査対象は家族の個人情報にまで及んでいる。著者三谷の詳細は不明だが、戦後の1949年に京都大学で博士号(医学)を取得している。

**2, 戦後の特別支援教育—各学校の「特殊学級」—**

京都市で戦後最初の「特別学級」が、GHQ占領下の実験学校(Try-out School)に指定されていた生祥小学校内に、1948(昭和23)年4月に開設された。同年11月には京都市教育委員会が発足し、翌年5月には仁和小学校、9月には小川・正親・崇仁・嵯峨・砂川小学校に「精神遅滞児学級」が設置された。「精神遅滞児学級」の教員組織である京都市精神遅滞児教育研究会が結成されたのは、この頃である。また、1949(昭和24)年には洛北中学校に、京都市最初の中学校の「精神遅滞児学級」が設置され、翌年には市立小学校5校と市立中学校7校に設置された。戦後の「精神遅滞児」教育は、南弘(初代指導主事)や高宮文雄(初代京都市精神遅滞児教育研究会会長)などに、生祥校「特別学級」担任の熊谷君子や戦後に教員となった森脇功、藤波高など、新しい世代が加わり、進められた。

**京都市精神遅滞児教育研究会『京都市立小学校 精神遅滞児学級の現況』1950年/京都市立小学校 特殊児童調査票 1951年**

『京都市立小学校 精神遅滞児学級の現況』には、知能検査の結果に加えて各校教員の要望などが記載されている。「特殊児童調査票」には、肢体不自由児の調査結果も記されている。どちらも、1950年頃の「精神遅滞児学級」が、どの小学校にいつ設置され、児童が何名いたのかなどを知り得る、重要な一次史料。

京都市立小学校 特殊児童調査票

I 精神遅滞児調査 (昭和二十六年三月調査)

学年	1	2	3	4	5	6	計
男	606	853	1013	843	909	993	5027
女	254	368	295	385	457	349	2118
計	860	1221	1308	1228	1366	1342	7142
特別学級	38	39	96	91	64	72	310
特別学級 別表							
合計	18910	25713	28781	28606	26098	20555	143393

(D) 精神遅滞児のための児童数 (男 51名) (女 30名)

学年	1	2	3	4	5	6	計
男	173	235	223	241	326	203	1401
女	142	216	175	228	230	166	1157
計	315	451	398	469	556	369	2558

検査種類

1	普通式	92
2	普通式	39
3	パーター	19
4	大塚式	10
5	鈴木式	4
6	鈴木式	2
7	鈴木式	1

II 肢体不自由児調査 (昭和二十六年三月調査)

学年	1	2	3	4	5	6	計
男	26	24	13	10	16	28	117
女	17	18	22	11	15	13	96
計	65	63	60	51	52	67	393
特別学級	57	65	62	54	42	61	341
特別学級 別表							
合計	6	10	8	11	8	6	49

(D) 肢体不自由児のための児童数 (男 42名) (女 34名)

学年	1	2	3	4	5	6	計
男	60	49	58	50	61	39	317
女	46	53	47	34	41	26	267
計	106	101	103	84	102	65	584

別表

1	視覚不自由	11
2	聴覚不自由	12
3	言語不自由	13
4	文盲	14
5	脳性麻痺	15
6	麻痺	16
7	脳性麻痺	17
8	麻痺	18
9	麻痺	19
10	麻痺	20

**京都市精神遅滞児教育研究会『昭和二十七年三月 精神遅滞児教育の実践報告 第二集』1952年**

本誌には、主に各学校の「精神遅滞児学級」担任による報告・論考が掲載されている。創刊は1951年。『第二集』の巻頭言(執筆者不明)は、市立小学校13万人の児童中、「精神薄弱のための入学猶予」になっている児童が89人いるとし、「十三万の中で八九名ではありますが、児童の人権が尊ばれる今日見逃がせない問題である」と指摘している。

**京都市立仁和小学校『本校の精神遅滞児教育』1953年**

仁和校の「精神遅滞児学級」について、1949年5月の設置当初から1953年4月までの詳細がわかる史料。同校が、1953年11月に開催された第三回全国特殊学級研究協議会の分科会場となったことを機に、編まれた。校長が記したまえがきには「この忘れ又忘れんとする子供達の前途に光を」、おそらく森脇功が記したのであろうとあきには「手をつないで、石にも花を咲かそうではありませんか!」とあり、田村一二の影響力の大きさがうかがえる。



**せいけつけんさ(楠のぼる編『たんぼぼ学級』1953年より)**

嵯峨小の「たんぼぼ学級」(精神遅滞児学級)は、1949年9月12日に設置され、翌年9月には男児9名、女児7名が在籍していた。写真掲載誌は、同学級の担任である楠昇が編んだ。仁和小の『本校の精神遅滞児教育』と並ぶ重要史料。楠は、1946年4月に田村一二が運営する石山学園(近江学園の前身の一つ)に出向き、学園で共同生活をした経験を持つ。各学校の「精神遅滞児学級」には、近隣の校区からも児童が通っていた。



**京都精神薄弱児育成会『いくせい』第1号**

京都精神薄弱児育成会は、結成翌年の1955年5月から、機関紙『いくせい』を発行した。本紙はその創刊号。



**プリント「是非お読み願いたい言葉と御通知」(十円会 北野中学校担任永井実 仁和小学校担任森脇功) 1958年  
京都市立仁和小学校・京都市立北野中学校『精神遅滞児学級設置仁和小学校十周年 北野中学校五周年 記念のしおり』1959年**

十円会は、1952年秋から開かれた仁和校「精神遅滞児学級」の保護者会の名称で、同会は「精神遅滞児学級」保護者会の先駆とされる。担任の森脇が、学校だと親が遠慮する、家庭だと親が我が子のことばかり考えてしまいがちになるという思いから、森脇の自宅まで夜7時から定期的に開いた。十円は、その会の茶菓子代。1955年には北野中学校に「精神遅滞児学級」が設置され、会場は仁和校と北野中を交互に利用することとなった。

**3, 呉竹養護学校の創設 —1950年代末から1960年代—**

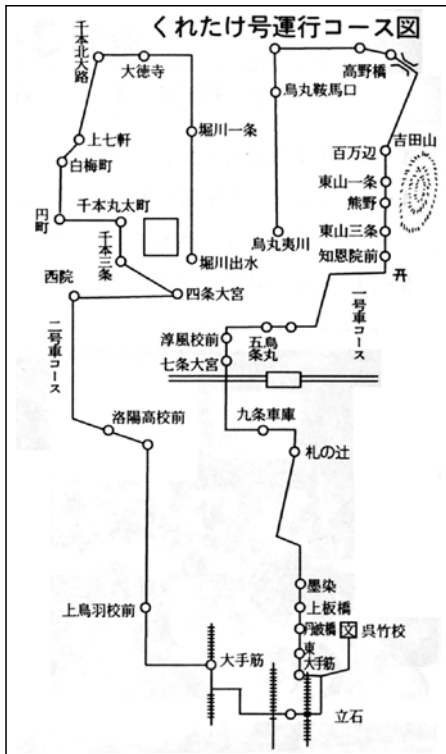
1950年代前半(昭和20年代後半)から、京都市教育委員会において養護学校設置の準備が進められ、1956(昭和31)年春、肢体不自由児のための「特殊学校」設置が京都市議会で採択された。同年秋には公立養護学校整備特別措置法が国会で成立、翌年4月に施行され、公立養護学校設置及び教員給与に国庫補助が出るようになった。その後、市教委や関係者などで上記「特殊学校」の開校について、1958(昭和33)年4月開校を目標に設置場所や規模などが話し合われ、伏見区の旧京都学芸大学(現京都教育大学)附属桃山中学校跡を買収し、施設を改修した上で開校することが決定された。1958(昭和33)年4月に桃山小学校呉竹分校が開校、同年10月に呉竹養護学校となった(肢体不自由養護学校としては全国5番目)。

同年10月には、小児結核保養所である桃陽学園(伏見区)の病院内学級が正式に藤ノ森小・桃山中の特殊学級となり、児童の学籍を両校に置くこととなった。また、1963(昭和38)年には情緒障害児短期治療施設である青葉寮(上京区)に教員2名が派遣され、これが「情緒障害」への教育的対応の始まりとなる。1966(昭和41)年には出水小学校(上京区)に「難聴学級」が設置され、以後、市内小学校に言語障害特殊学級が設置され始めるとともに、障害児教育におけるノーマライゼーションの必要性が関係者の間で認識され始めた。しかし、学校教育法で定められた養護学校における就学義務の施行は延期されたままで、障害のある子どもの実態や教育を受ける権利についての理解がまだ一般的に進んでおらず、養護学校を新設するためには広報映画を作成するなど世論にうったえる活動が必要とされていた。



**スクールバスに乘車 1958年 呉竹養護学校**  
**くれたけ号運行コース図** (『呉竹創立40周年記念誌』1998年より)  
**呉竹養護学校**

1958年4月15日、呉竹校は小学部6学級73名の児童と14名の教職員でスタートを切った(翌年に中学部設置)。中古バスが2台購入され、スクールバス「くれたけ号」として同年6月5日から、1号車が市内東部を、2号車が市内西部を運行した。当時のバスには肢体不自由児のための改造は施されていないかった。



**全校一斉粘土工作 1958年 呉竹養護学校**  
 職能訓練の一環で、粘土工作や園芸、編み物などが行われた。



**入学選考 1958年 呉竹養護学校**  
 養護学校の義務化が施行されていない頃は、入学選考が行われ、比較的軽度の障害の子が入学することができた。



**保護者による校内整備 1958年 呉竹養護学校**  
 戦後しばらくの間に創設された小中学校は、グラウンドを造る作業を児童生徒が担うケースが多々あった。呉竹校は肢体不自由児のための養護学校なので、保護者の力に負うところが多かった。



**避難と消火の訓練①② 1958年 呉竹養護学校**  
 救急隊と消防隊が訪問し、訓練を行っている。



**バス記念日 1959年 呉竹養護学校**  
 スクールバス運行1周年を記念して、6月5日は「バス記念日」とされ、児童生徒から運転手に花束と感謝の言葉が直接届けられた。4年後の同記念日には、5年間無事故を称えた祝賀式が行われた。



竹ひこで作った飛行機を持って 1960年 呉竹養護学校



学芸会 1960年 呉竹養護学校



言語訓練①②③ 1965年 呉竹養護学校

学年別ではなく障害に応じて行われた、機能訓練の一環。この年、言語障害児（小1～中3）は重度・中等度・軽度をあわせて67人在籍していた（全校児童生徒140人中）。同年には、重複障害児のための特殊学級が、学校の判断で設置された。



中庭で散歩(京都市桃陽学園『そして10年1962記念誌』1962年より)

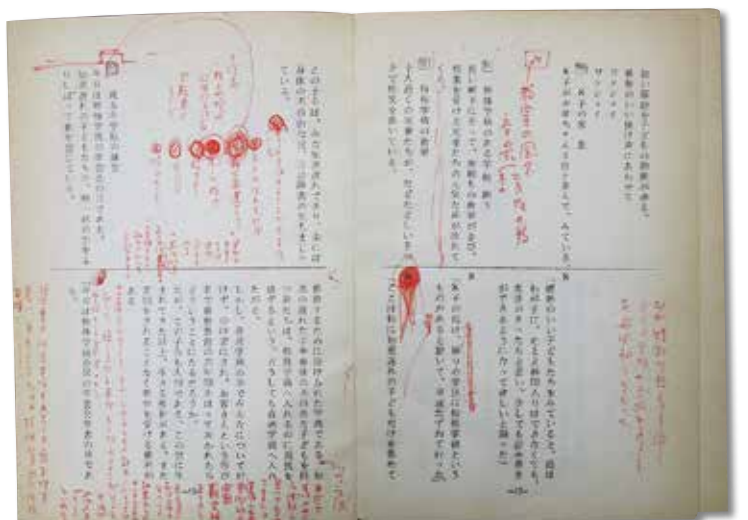
1952年に小児結核保養所として開設された京都市桃陽学園には、当初から藤ノ森小学校の教員が、1957年からは桃山中学校の教員が派遣され、児童生徒の教育にあっていた。翌58年には、院内学級が正式に両校の特殊学級となった。



(映像) 京都府広報映画『人』(16mmモノクロ) 1968年 京都府立総合資料館蔵 ※京都府立総合資料館では閲覧・貸出は行っていません

京都府広報映画『人』台本 1968年

この約30分の広報映画には、障害があるために学校に行きたくても受入れ校がなく不就学となっていた子どもの姿、1967年に開校した京都府立向日が丘養護学校（肢体不自由、長岡京市）の授業風景や訓練風景などが映されている。憲法第26条に明記されている、子どもの教育を受ける権利を保障するための取組であり、1967年から68年にかけて府広報課によって製作され、68年5月3日の憲法記念日府民のつどいで初公開された。紫明小学校の特殊学級の様子が映され、そこには当時の担任であった森脇功による説明音声も記録されており、貴重な史料となっている。展示の台本は、森脇が所蔵していたもので、シナリオ修正の跡が多数残されている。





**京都会館での合同音楽発表会 1970年 呉竹養護学校  
楽譜「青い空」「ことりになりたい」(京都市立呉竹養護学校『10周年  
記念研究集録』1968年より)**

1970年1月、京都会館第二ホールにて、呉竹校の児童生徒と同窓生による合同音楽発表会が開催された。曲目中、同校児童によって作詞・作曲された「ことりになりたい」は、肢体不自由児の心境が率直に表現されており、大きな反響を呼んだ。後に、呉竹校15周年を記念して歌詞の記念碑が校内に建てられた。



**玉村信雄「曲目について」(部分、「音楽発表会プログラム」1970年より)  
音楽発表会を指導した呉竹校教員・玉村が、「ことりになりたい」が歌  
われることになった経緯を記している。**

今度の練習でこんなことがありました。みんなで歌うのに何がよいか。言語障害の子どもたちも多いし、何とか引き立つようなものをと、「ドレミ」を選んだのです。次は、ある日の六年生との対話です。  
私「さあ、ドレミを練習します。」  
児童「またドレミか。」  
私「なんや、面白なきそやな。」  
児童「こんなんしょうもない。」  
私「それでもれら、初めは喜んで歌うてたやないか。」  
児童「何べんもうとてたらあるわ。内容がないもん。」  
私「そうか。そんなら、君達が一番歌いたい歌をいいなさい。」  
児童「(一斉に)ことりになりたい。」

**4, 養護学校義務制実施の頃 —1970年代以降—**

1973(昭和48)年、京都市教育委員会に特殊教育課が設置され、同時に京都市立養護学校建設準備室が開設された。各校の特殊学級や呉竹校に入学してくる児童生徒の、障害の重度・重複化、多様化に応えるためである。一方国からは、同年11月に「学校教育法中養護学校における就学義務及び養護学校の設置義務に関する部分の施行期日を定める政令」が出され、1979(昭和54)年4月から養護学校の義務制がいよいよ実施されることとなった。一方で、義務教育終了後の進学先として養護学校高等部の設置も急務となった。

**作文「ぜんそく」  
(中学1年、京都市桃陽学園『回遊路 昭和45年度』1970年より)**

ぜんそくに苦しみながらも、桃陽学園のことを知り入学した生徒の心境が、記されている。

ぜんそく  
中学一年 西村 武史  
今、ぼくは、桃陽学園に、はいっている。それは、大きな  
ぜんそくのせいで、二月日から、ぼくは、ぜんそくとつまあってい  
る。ぜんそくが、ぼくの体ごとくこんでいるように思える。  
つゆには、かみかみ、言ってもいいほど発作がでた。母は  
その光景に夜中まで起きて、ぼくを、いっしょに、つらい思い  
をくりかえした。  
発作が、おさまって、あまがしむかになつた後、目から、  
しんと涙がながれてきたこともあった。  
そんな日をふくみかきつて、十二年……。去年の11月のある  
日、ぼくは、桃陽学園のことを知った。見学に来て、ぼくは、  
直ちに、桃陽学園へはいれる決心をした。  
入学したものの、その日から、「くらくらしい、くらくらしい」の、  
連続だった。例の光景に入学したのかわからないうちのまものだ  
つた。  
先生も、看護婦さんもひびいて、通病してくださつた。うれ  
しかった。  
それきりの今では、もんくま、言つては、その人達をこ  
ろめる。  
今、ぼくの毎日は、ぜんそくをたかすためにある。  
うたげれ、ぜんそく……!

**乾布摩擦(『回遊路 創立20周年記念』1973年より)  
京都市桃陽学園**



**保護者宛て「校舎移転お手伝いお願い」1979年 呉竹養護学校桃陽分校**

1974年4月、桃陽学園の特殊学級が市立呉竹養護学校桃陽分校となり、79年4月には桃陽養護学校として独立発足した。新校舎への物品運搬は、文字通り「みんなの力」で進められた。

保護者宛  
昭和54年2月24日  
京都市立呉竹養護学校  
校舎移転お手伝いお願い  
謹啓  
貴校児童のよいと制から前校舎の物品運搬の旨は、  
はなはだ感謝の意、お返し申し上げます。  
さて、去る2月21日村京都市開校50周年記念行事  
ごさいしゅうのよによら4月1日村京都市立呉竹養護  
校にて社説発表の運びになりました。  
そこで、新校舎定員は、下記のように御物品、御手  
伝、小学1年生より、中学3年生まで、貴校にお父さん  
お母さんなどをお含めて新校舎へ運ばせたいと思  
ひ存じますので、ご多難には存じますが、何れも、  
ご尽力、ご協力のいたしませうお願い申し上げます。  
記  
日時 昭和54年3月17日(日) 午前9時—12時  
17日 午前9時—午後5時、校内児童  
18時より、普通部教員有志  
20日 午前より、特別部教員有志  
11時半より、校舎の掃除  
註 ①スワッチの、三機各台ご持参下さい。  
②居室は自由時間をご利用します。  
③ご協力、ご多難を御礼申し上げます。

**掲示物「教室」「児童生徒総会」「体育クラブ」「中卒者の作業」  
1974年 御室小・双ヶ丘中特別学級(宇多野病院内)**

1970年、宇多野病院内に、筋ジストロフィー児学級が御室小学校特殊学級として設置された。翌年には、中学生のための双ヶ丘中学校特殊学級も設置された。これらの特殊学級は、鳴滝総合支援学校の前身。同校には院内学級時代からの掲示物や動画フィルムが現存しており、貴重な史料となっている。



**双ヶ丘中学校生との交流会で卓球バレー 1978年 鳴滝養護学校**  
卓球バレーは、1974年の第5回近畿筋ジストロフィー症児交歓会スポーツ交流会で実施されて以降、鳴滝校が競技発展の中心となった。鳴滝校前には、その功績を称える記念碑が設置されている。「交流」という言葉が公的に使用されたのは、1978年の教育課程審議会答申が初めてだが、この交流会はそれ以前から行われていた。



**もちつき大会 1981年 鳴滝養護学校**  
地元の方々との交流の様子。



**掲示物「学校の様子 校内学習」「学校の様子 校外学習」(写真2点欠)**  
宇多野病院の院内学級は、1975年に呉竹養護学校鳴滝分校として開校、

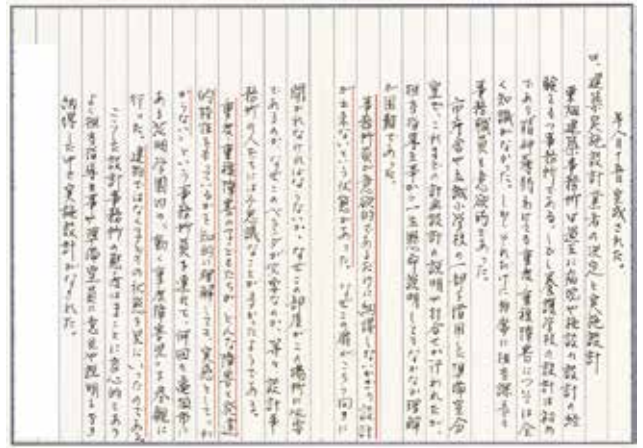
**1976年 呉竹養護学校鳴滝分校**  
1977年に鳴滝養護学校として独立、あわせて高等部を設置した。





「開校までの特記事項」より「建築計画設計の開始」「建築実施設計業者の決定と実施設計」(『学校沿革史』より) 1976年 東養護学校

1976年4月、京都市初の知的障害児のための養護学校として、東養護学校が開校した。『学校沿革史』の冒頭部分には、開校までの道のりが書かれている。その記述からは、開校に携った教員が「重度・重複障害の子どもたち」の教育のために何を考え、何を議論し、どのような意図で校舎設備を整えていったのかが記されている。



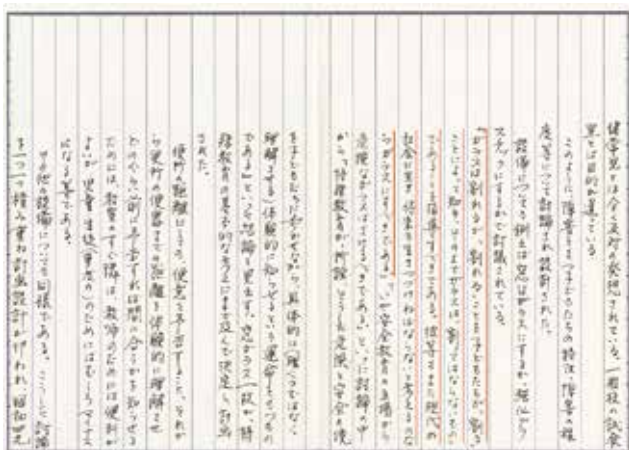
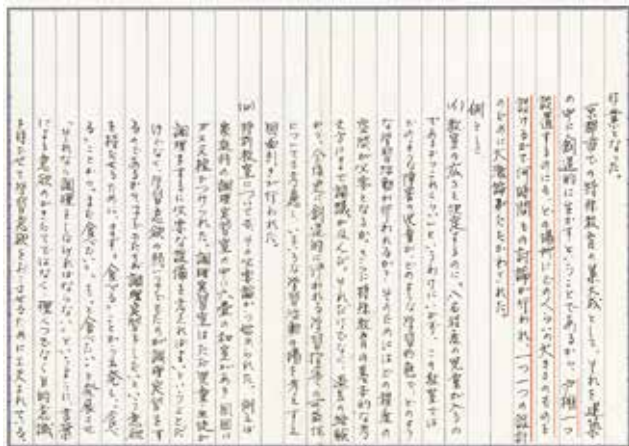
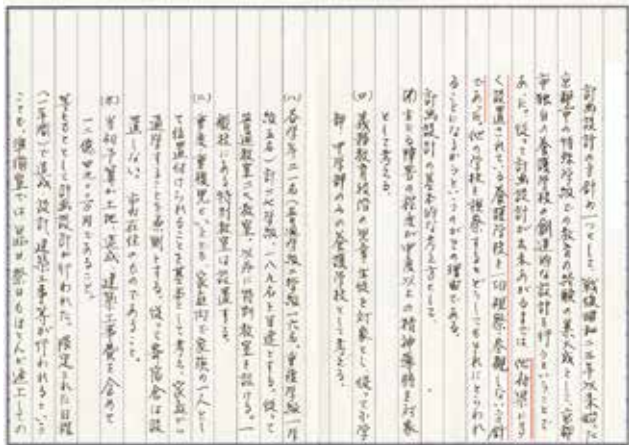
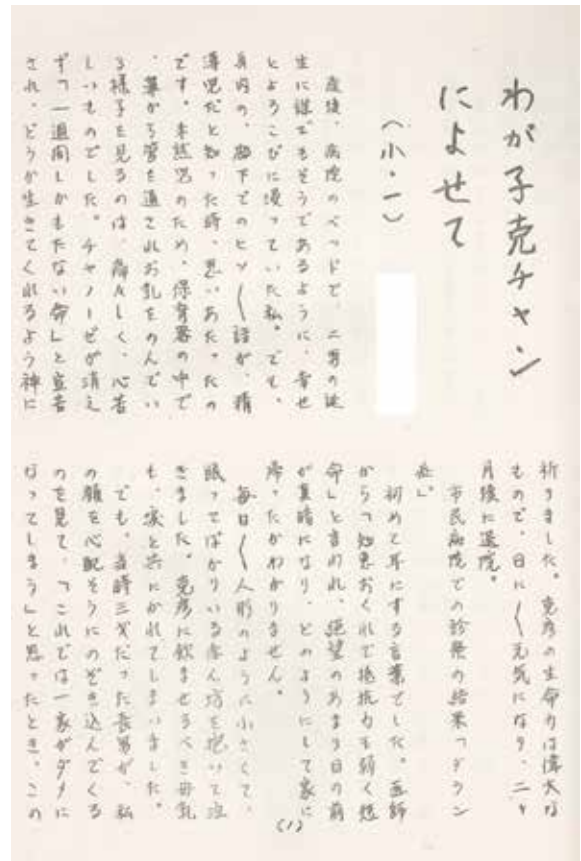
(パネル) 運動場東側のすべり台(『創立10周年記念誌』1977年より) 1976年 東養護学校

このすべり台は、現在でも校庭東側に残っている。



小学部の母親「わが子克ちゃんによせて」(育友会『文集 特殊教育障害児教育100周年記念』1978年より) 東養護学校

創設期の東養護学校に通う児童の母親の気持ちだが、率直に書かれている。文章中に出てくるダウン症について、当時はまだ一般的にほとんど知られていなかった。 ※執筆者の氏名は伏せてあります







公開授業指導案より「職業科指導案」 1979年 白河養護学校

1976年4月、錦林小学校福ノ川分校跡地を利用して、自主通学を原則とする高等部単独の白河養護学校が開校した。同校設立の趣旨には、「家庭生活、職業生活に必要な能力・態度を養い、社会自立を目指す教育を行なう」とあり、開校3年目の1978年4月に文部省及び京都市の研究指定を受けた。

〔職業科〕指導案 54-1-24(水)			
指導者氏名	対象生徒	授業場所	授業生徒人数
西尾誠記	3-EF男子	金工室	男9名 女1名
単元	電気		
小単元	テーブルタップづくり		
単元のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>電気についての一般的知識を深め、簡単な家庭用の作業への応用を図る。</li> <li>各組の責任分担を果し、元々の力を発揮する。</li> </ul>		
本時の学習内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーブルタップの構造</li> <li>作業の分担</li> <li>工具の正しい使用</li> </ul>		
本時の展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の分担 配線 結束 作業</li> <li>① 配線の切断 ② 配線の接続</li> <li>③ 配線の接続 ④ 配線の接続</li> <li>⑤ 配線の接続 ⑥ 配線の接続</li> <li>⑦ 配線の接続 ⑧ 配線の接続</li> <li>⑨ 配線の接続 ⑩ 配線の接続</li> <li>⑪ 配線の接続 ⑫ 配線の接続</li> <li>⑬ 配線の接続 ⑭ 配線の接続</li> <li>⑮ 配線の接続 ⑯ 配線の接続</li> <li>⑰ 配線の接続 ⑱ 配線の接続</li> <li>⑲ 配線の接続 ⑳ 配線の接続</li> <li>㉑ 配線の接続 ㉒ 配線の接続</li> <li>㉓ 配線の接続 ㉔ 配線の接続</li> <li>㉕ 配線の接続 ㉖ 配線の接続</li> <li>㉗ 配線の接続 ㉘ 配線の接続</li> <li>㉙ 配線の接続 ㉚ 配線の接続</li> <li>㉛ 配線の接続 ㉜ 配線の接続</li> <li>㉝ 配線の接続 ㉞ 配線の接続</li> <li>㉟ 配線の接続 ㊱ 配線の接続</li> <li>㊲ 配線の接続 ㊳ 配線の接続</li> <li>㊴ 配線の接続 ㊵ 配線の接続</li> <li>㊶ 配線の接続 ㊷ 配線の接続</li> <li>㊸ 配線の接続 ㊹ 配線の接続</li> <li>㊺ 配線の接続 ㊻ 配線の接続</li> <li>㊼ 配線の接続 ㊽ 配線の接続</li> <li>㊾ 配線の接続 ㊿ 配線の接続</li> </ul>		
留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>各組の責任分担を果し、元々の力を発揮する。</li> <li>配線の接続に注意する。</li> </ul>		
備考	① 写真参照		

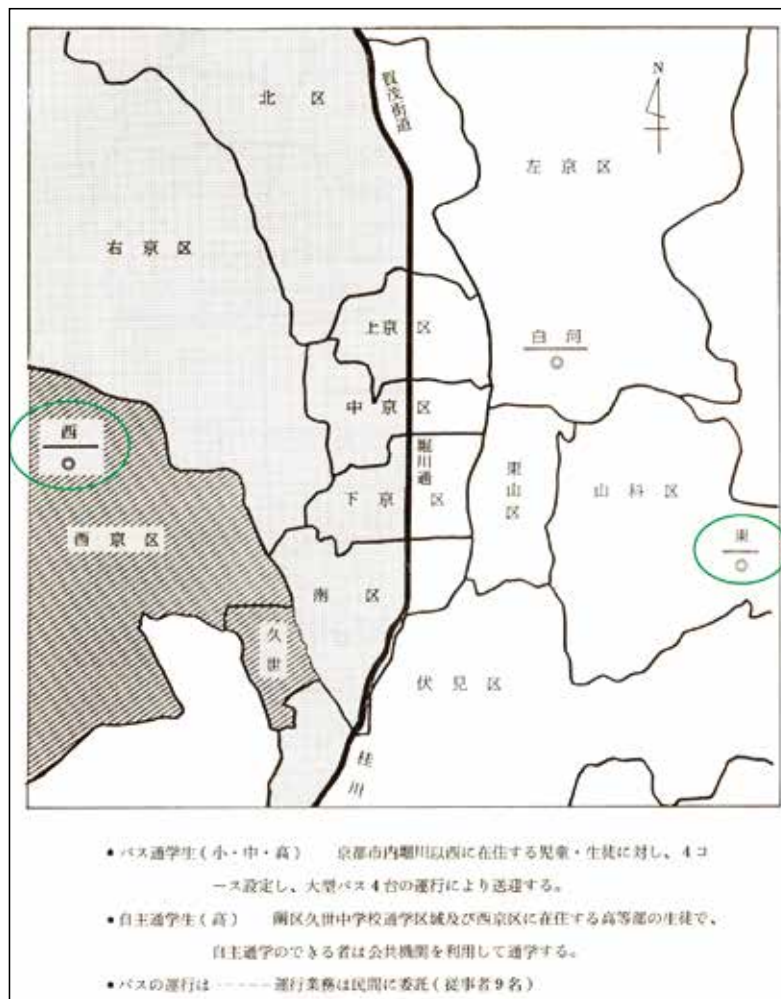
周辺で宅地整備が進む頃の校舍写真(『西養護 創立五周年記念誌』1991年より) 1988年 西養護学校

1979年に養護学校の義務制が実施され、翌年には就学猶予・免除者はゼロになった。一方で、養護学校の児童生徒数は年々上昇し、さらに市内の交通状況の悪化からバスの運行時間が長くなり、新たな養護学校の設置を望む声が年々高まった。1984年1月、市が新たな養護学校(知的障害、小・中・高)を市内西部に設置することを決定し、1986年4月、西養護学校が桂坂に開校した。現在では、周辺部は新興住宅地になっている。



西養護学校通学区区域図(「平成2年度 学校要覧」より) 1990年 西養護学校

東養護学校と西養護学校の通学区は、京都市内を南北に走る堀川通を目安に東西に分けられた。



## 5, 総合支援学校の時代 —総合制・地域制のはじまり—

西養護学校が開校して6年後の1992(平成4)年6月、京都市では「特殊学級」を「育成学級」に、「特殊教育」を「養護育成教育」に改称した。「特殊」という言葉が、あたかも障害のある子どもが特殊であるかのような印象を与えるからである。

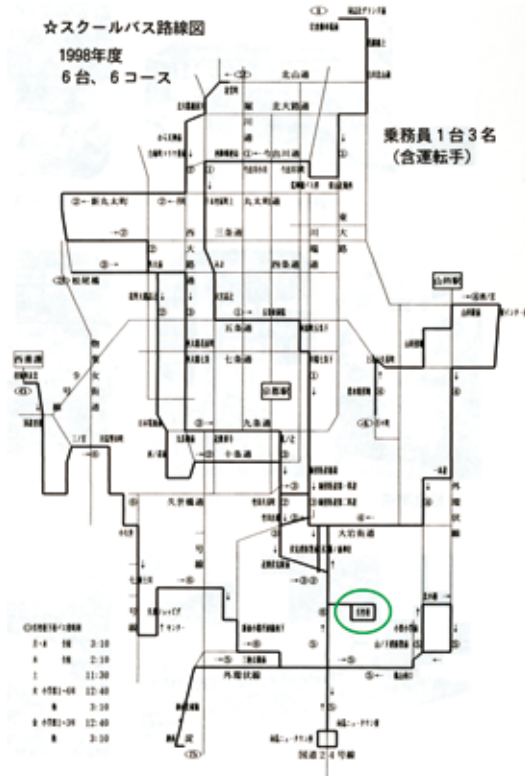
当時の養護学校は、大きな2つの課題を抱えていた。一つ目は、重複障害児の教育であり、1989(平成元)年には障害のある児童生徒のうち、重複障害の比率が小・中学部で95%、高等部で82%に達しており、障害種別の教育を超えた教育のあり方が模索されるようになった。二つ目は通学時間の長時間化であり、市内唯一の肢体不自由児のための養護学校だった呉竹校のバスは、1993(平成5)年の時点で最長で1時間40分もかかるような状況となっていた。これらの課題を乗り越えるため、1992(平成4)年に教育長の諮問機関として「京都市の養護育成教育の今後のあり方について」検討委員会が設置され、そこでまとめられた意見は「養護育成教育の今後のあり方研究プロジェクト」へと引継がれた。

### 初年度の入学案内 1996年 桃陽養護学校

桃陽養護学校の院内分教室として、国立京都病院内に1972年に小学部、翌年には中学部の院内学級が設置された。1990年代には、京大病院への院内学級設置を望む声が高まり、1996年4月に京大病院分教室が開校された。

### 呉竹校スクールバス路線図(『呉竹創立40周年記念誌』1998年より)

1998年には、呉竹校のバスは6台、計6コースを回っていた。



### 京都市内の養護学校(「養護育成教育の今後のあり方について(養護学校の再編に向けた基本的方向)〈報告〉」より) 1999年11月

1996年に設置された「京都市教育委員会 養護育成教育の今後のあり方研究プロジェクト」が1999年に作成した報告書の一部。この報告書では、京都市内を東西南北の校区に分け、北部に養護学校を新設(または移転)して各校区に養護学校を置き、それぞれの学校で総合制・地域制の教育を行なうことなどが提案されている。これらの提案は、修正を経た上で、2004年の北総合養護学校開校、総合制・地域制の開始、職業科の創設によって、実現化された。



### パンフレット:「平成16年4月京都市立養護学校がかわります」(2001年6月)、「企業就職へのサポート 働く生活にチャレンジ!!」(2002年9月)

2004年度からの、総合制・地域制の新養護学校誕生、白河・鳴滝両養護学校における職業学科の創設に向けた、パンフレット。2004年4月から、各養護学校は総合制を導入し、総合養護学校となった。さらに同年6月からは、「養護育成教育」は「総合育成支援教育」と呼ばれるようになった。



### 校舎(部分) 2014年 北総合支援学校

2004年、元成逸小学校跡地に誕生した北総合養護学校は、当時としては珍しい都市中心部、かつ高層の養護学校。開校後数年間は、毎日のように全国から関係者が見学に訪れた。校舎内の教室は、一人一人のニーズに応じた総合的な教育のため、パーティションで広さが変更でき、他にロッカーが可動式であるなど工夫が施されている。写真手前の細長い校舎は、後に増築された。



### 用語説明

- ※**総合制**…児童・生徒の障害の重度・重複化・多様化にふさわしい教育を行なうために、障害種別の教育ではなく、一人一人のニーズに応じて行われる総合的な教育のあり方。広義には、各総合支援学校が小学校・中学校教育へ総合的な支援を行うという意味も含まれる。
- ※**地域制**…発達遅滞養護学校である東養護学校・西養護学校で導入されていた通学区制を、2004年からの総合制導入に合わせて市内を4通学区に分け、地域制と位置づけるようになった。地域制という呼び方には、通学区のことだけではなく、地域の方々に支えられ地域の中で学ぶ教育、という意味も込められている。
- ※**職業学科**…白河総合養護学校の高等部産業総合科、鳴滝総合養護学校の高等部生活産業科の総称。2004年に、前者は普通科から改変、後者は新設された。

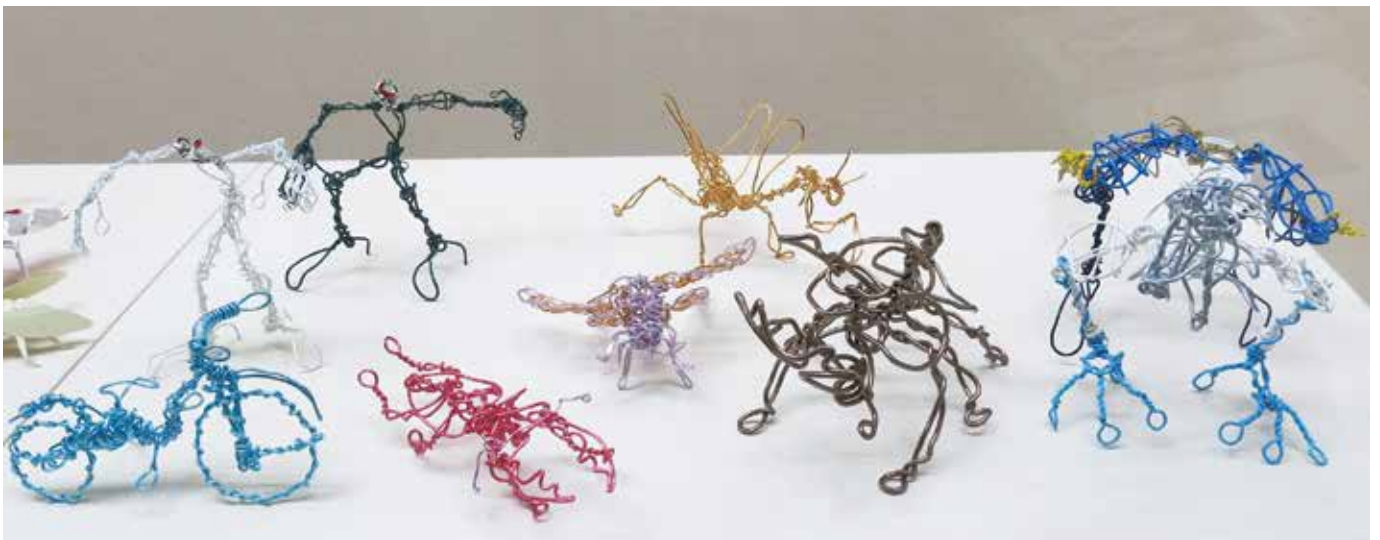
### 現在の総合支援学校(地図)

2007年の学校教育法の改正で「特殊教育」が「特別支援教育」に改められたことなどにあわせて、京都市では総合養護学校を総合支援学校に改称した。「特殊」という言葉がそうであるように、「特別」という言葉があたかも障害のある子どもが特別であるかのような印象を与えるからである。2016年4月には、白河総合支援学校東山分校が東山総合支援学校として独立開校する予定。



**【天才アートミュージアム (NPO 法人 <sup>がい</sup> 障害者芸術推進研究機構) 作品】**

障害者芸術推進研究機構は、学齢期より生涯にわたり、継続して制作活動のできる場の確保や作品の芸術的評価やデザイン化活用等の支援と、そのために必要な様々な事業や取組を推進・研究することを目的として、2011(平成23)年8月に設立された。翌年9月には、元新道小学校校舎内「四条・新道アトリエ」を開設した。京都市内や隣接市から、アーティストたちが通って来て制作に取り組んでいる。



**怪獣/ケモノ/昆虫 など**

紙・カラー針金 2013-2015年

小山怜志

(制作時 高等部1-2年, 1998年生)



**月見(「上田彩の歳時記」より)**

画用紙/色鉛筆 280×381mm 2013年

上田彩 (制作時 既卒, 1989年生)





左上：ぼすと PC制作 2014年  
 右上：ひみこ キャンバス/アクリルガッシュ  
 318×408mm 2015年  
 左：上目 紙/カラー筆ペン 182×256mm 2014年  
**山元真菜子** (制作時 高等部2年, 1997年生)  
  
 下：ちはるの食べものコレクション (部分)  
 紙/カラー筆ペン 182×256mm 2014年  
**本 ちはる** (制作時 小学部5年, 2003年生)



## 京都における特別支援教育のあゆみ 関連略年表

1874	(明治 7) 年頃	上京第十九区小学校(後の待賢小学校)の教師・古河太四郎が同区長熊谷伝兵衛と協力して聾啞教育を開始
1878	(明治 11) 年	盲啞院が東洞院通御池上るに仮設
1905	(明治 38) 年	脇田良吉が淳風尋常小学校内に春風倶楽部を創設
1922	(大正 11) 年	市内最初の公設特別学級が成徳尋常小学校に設置される
1933	(昭和 8) 年	田村一二が滋野尋常小学校に勤務し特別学級を担任
1947	(昭和 22) 年	教育基本法・学校教育法の施行〈全国〉
1948	(昭和 23) 年	生祥小学校に戦後初の特殊学級が設置される
1950	(昭和 25) 年	7つの中学校に特殊学級が設置される
1953	(昭和 28) 年	京都肢体不自由児母の会(現・京都市身体障害児者父母の会連合会) 結成
1954	(昭和 29) 年	京都精神薄弱児育成会(現・京都手をつなぐ育成会) の結成
1956	(昭和 31) 年	公立養護学校整備特別措置法成立(施行は翌年)〈全国〉
1958	(昭和 33) 年	市立呉竹養護学校(現・市立呉竹総合支援学校) 開校
1974	(昭和 49) 年	市立呉竹養護学校桃陽分校(現・市立桃陽総合支援学校) 開校
1975	(昭和 50) 年	市立呉竹養護学校鳴滝分校(現・市立鳴滝総合支援学校) 開校
1976	(昭和 51) 年	市立東養護学校(現・市立東総合支援学校) 開校
1976	(昭和 51) 年	市立白河養護学校(現・市立白河総合支援学校) 開校
1979	(昭和 54) 年	養護学校の義務制実施〈全国〉
1986	(昭和 61) 年	市立西養護学校(現・市立西総合支援学校) 開校
2004	(平成 16) 年	市立養護学校6校の再編, 市立北総合養護学校(現・市立北総合支援学校) 開校, 総合制の導入。
2007	(平成 19) 年	学校教育法改正〈全国〉。各市立総合養護学校が総合支援学校に改称, 「総合育成支援教育」を掲げる。

### 主な参考文献

- ・京都市立北総合支援学校『創立10周年記念誌』(2014年)
- ・京都市立呉竹総合支援学校『創立50周年記念誌』(2008年)
- ・京都市立白河総合養護学校『創立30周年記念誌』(2005年)
- ・京都市立総合支援学校長会・京都市教育委員会総合育成支援課編『輝け きょうの子どもたち——京都発 障害のある子どもの新たな教育の創造——』(ミネルヴァ書房, 2007年)
- ・京都市立桃陽総合支援学校『創立30周年記念誌』(2009年)
- ・京都市立鳴滝養護学校『創立20周年記念誌』(1997年)
- ・京都市立西総合養護学校『創立20周年記念誌「西」』(2005年)
- ・京都市立東総合支援学校『創立40周年記念誌』(2015年)
- ・京都精神薄弱者育成会『道しるべ』(1969年)
- ・小森茂編『田村一二の人と仕事』(小森茂, 1967年)
- ・清水寛「滋野小学校の特別学級と田村一二先生」藤本文朗・藤井克美編『京都障害者歴史散歩』(文理閣, 1994年)
- ・白川学園『百年のあゆみ——百万遍から鷹峯——』(社会福祉法人白川学園, 2009年)
- ・菅田洋一郎・藤波高「京都府戦後障害児教育小史(1)——昭和20年代における京都府障害児教育の復興——」『京都教育大学教育研究所・所報』(第29号, 1983年)
- ・菅田洋一郎・玉村公二彦「戦前の京都における障害児教育成立の諸前提(1)」『京都教育大学教育実践研究年報』(第4号, 1988年)
- ・玉村公二彦「戦前京都における障害児調査と障害児保護・教育事業」『京都大学教育学部紀要』(第34号, 1988年)
- ・玉村公二彦「脇田良吉の『低能児』教育論の形成とその具体化——明治40年代初頭を中心に——」『奈良教育大学紀要』(第42巻第1号, 1993年)
- ・玉村公二彦「戦前京都市における『特別学級』の成立・展開とその実態——京都市立養正尋常高等小学校『特別学級』を中心に——」『奈良教育大学紀要』(第49巻第1号, 2000年)
- ・玉村公二彦・服部敬子「戦後京都府における障害児教育の進展と学校づくり——京都府広報映画『人』(1968年)を中心に——」『資料集 戦後京都府における障害児教育の進展と肢体不自由教育・知的障害教育——権利としての障害児教育の確立をめざす実践・運動・映像——』(奈良教育大学, 2015年)
- ・玉村公二彦「発達保障のために学びたい本 連載第7回 田村一二著『忘れられた子等』」『障害者問題研究』(第43巻第3号, 2015年)
- ・中瀬淳「障害児福祉」京都市児童福祉史研究会編『京都市児童福祉百年史』(京都市児童福祉センター, 1990年)
- ・平田勝政「明治期における『精神薄弱』関係用語・概念の研究——『低能児』概念を中心に——」『日本教育史研究』(第15号, 1996年)
- ・藤波高『とり残された子らの京都の教育史——明治・大正・昭和の実践——』(文理閣, 1989年)
- ・森脇功「障害をもつ子の教育をもとめて(上)——特殊教育の歩み——」『現代人』(第32巻第2号, 1983年)
- ・森脇功「障害をもつ子の教育をもとめて(下)——特殊教育の現状と課題——」『現代人』(第32巻第3号, 1983年)
- ・脇田良吉『白川学園』(日乃丸会, 1926年)

### 協力機関及び協力者(50音順・敬称略)

京都市立北総合支援学校／京都市立呉竹総合支援学校／京都市立白河総合支援学校／京都市立桃陽総合支援学校  
京都市立鳴滝総合支援学校／京都市立西総合支援学校／京都市立東総合支援学校／京都市立養正小学校／京都府立総合資料館  
社会福祉法人白川学園／特定非営利活動法人障害者芸術推進研究機構  
朝比奈覚順／奥田信一／重光豊／玉村公二彦／平田勝政／森脇功／山元暢／脇田宣／渡部昭男

### 図録 京都における特別支援教育のあゆみ

執筆・編集／和崎光太郎(京都市学校歴史博物館学芸員) 発行／京都市学校歴史博物館(TEL.075-344-1305・水曜休館)  
発行日／2016年1月29日 印刷／(株)ユニティ ©京都市学校歴史博物館